

第二種七卷本系宝物集と六条歌学

— 藤原清輔著歌学書とのかかわりをめぐって —

千 古 利 恵 子

〔抄録〕

第二種七卷本系宝物集の編纂には、様々のジャンルの作品が利用されたといわれている。その中には、藤原清輔の歌学書類も含まれていたと考えられる。第二種七卷本系宝物集と清輔歌学書の両者に掲出されている和歌を調べてみると、五十一首の一致歌が認められる。そこで、両者の一致歌および一致歌に付された宝

物集と歌学書の各々の本文を比較・吟味することによって、清輔の歌学書が第二種七卷本系宝物集の編纂に深くかかわっていることを検証してみる。

キーワード…第二種七卷本系宝物集、袋草紙、奥義抄、藤原清輔

I

今井ちとせ氏は、論稿「宝物集の成立背景をめぐって——顕昭歌論との関連から——」¹⁾ 、『中世文学論叢』第六号Ⅴにおいて、第二種七卷本系宝物集の構成内容に六条歌学が深くかかわっていることを指摘している。そこで本稿では、六条家の歌人であり、また歌学者でもある藤原清輔の歌学書類が第二種七卷本系宝物集の編纂におよぼした

影響について、両者の一致歌およびそれら一致歌に付された本文を比較し、若干の考察をこころみてみる。

II

第二種七卷本系宝物集の一本である吉川泰雄氏蔵本¹⁾には、仏教の教えを説くにあたって四二八首の和歌が例歌として引用されている。そ

これらの和歌のうち五十一首は、藤原清輔の歌学書——奥義抄・袋草紙・和歌初学抄⁽²⁾に収録されている詠である。次に、それら一致歌五十一首に、清輔が歌学書において付した注釈本文を掲出・表示〈表Ⅰ〉
 してみる(ただし、紙数の都合上から、全文掲出しなかった場合もある)。

る)。なお、一致歌が勅撰集に収録されている場合は、その勅撰集名を掲げ、七卷本収録歌と勅撰集所収歌との本文異同についても表示〈表Ⅱ〉してみる。

△表Ⅰ

第二種七卷本系 宝物集 (吉川泰雄氏蔵本)		清 輔 著 ・ 歌 学 書 (日本歌学大系所収本)	
歌番号	初 句	歌学書名	一 致 歌 に 付 さ れ た 本 文
1	殿守の	奥義抄・中	或人云、主殿の下部は伴氏にてあるなり。みやつことはかの氏のかばねなりと申せど、伴のかばねは朝臣なり。おほつかなし。もしもとは公といふ字をよめば、君のみやつこといふにや。やつことは奴なり。君の御奴といへるにこそ。(略)
5	去年みしに	袋草紙・上	後拾遺究竟之歌三首漏。所レ謂(略)兼方朝臣歌去年見しに(二句以下略)是也。
8	住人も	袋草紙・上	于レ時四條大納言出家して住ニ北山長谷一。定頼卿以ニ此和歌等一送レ此。大納言此歌ヲ深感歎して此歌を表に書て、範永誰人ぞや、和歌其體をえたり。範永聞ニ此事ニ不堪レ感。向ニ定頼卿亭一、乞ニ取彼愚草一、納ニ錦袋一、爲ニ重寶ニ云々。(略)
11	翁さび	奥義抄・中	おきなさびとはおきなされともまうす。又おきなささびともいへり。すさびはあだにうちすることなり。おいさびと云ふも此心なり。
13	大井河	和歌初学抄	両所ヲ詠歌
14	すべらぎの	奥義抄・上	其曲五かへり、是を五節といふ。かの時よりはじまりて今におこなはる、事也。すべらぎのきみもこれにてみことのりをくだしき。天平感寶元年陸奥国に出レ金時詔書、反歌、大伴家持作、
15	をしてるや	奥義抄・上	和歌九品 七、下上 わづかに一ふしある也。

20 21 29 39 58 59 62 72 76

百さかや

和歌初学抄
奥義抄・下

秀句 監 ミツ ヒル カル ヒク トモ カラシ ヤク タル

玉くしげ

袋草紙・上

是は法文にいへる也。人の子は母の乳百八十石をのむ也。さればも、あまりやそとぞいふべきを、さかとよみたれば數とおほしき也。かずは物をかぎること、又さかひといふはものをかぎることなれば、かずといふころにてさかとはよめるにこそ。のち見む人さだむべし。

或女房佛供養導師に實源律師請じたるに、事の不利叶にて人なんどもみえざりければ、如レ形申上て出むとするに、簾中より硯筥おし出したるを取て歸見れば有ニ歌一首。玉匣(二句以下略)後朝レ送和。

おもひ兼ぬれてほす

奥義抄・中

今朝こそは明ても見つれ玉匣ふたよりみより涙ながれて

楊貴がころされし野をたづねにおはしつゝ、見給ひける所をよめるなり。長恨歌と云は是なり。

是は人の仙宮にいりて、ときのほど、思ひけるに千とせをへたることのあるをよめる也。

仙宮には菊のおほかればかくよめり。

泰山不レ讓ニ土壤ニ故成ニ其高一といふ文の心なり。又古今序にもみえたり。

君が代は宵のまに

奥義抄・中

一、和歌若連歌云出事

俊頼朝臣極テ大事也とぞ申ける。(略)一條院御時、源兼澄陪從侍、大入道殿御前候給。仰云、歌一首可レ仕。仍一句申出。よひのまに、暫停滯被レ責。次おもほゆるかな。一句々々隨ニ思得ニ申出云々。希有之由萬人褒譽。入道殿下賜ニ御単衣ニ云々。

十八 詞病事

逢までと

奥義抄・上

又歌に詞病と云事あり。あふまでと(二句以下略)是等又よき歌也。たゞいかなることよくつゞけつればあしくも聞えず。(略)

長元歌合ノ日(略) あふまでと(二句以下略) といふ歌を講出を聞て竊退出云々。

燕の太子丹といふ人、秦始皇の時秦にゆけり。本國にかへらむとするをみかどゆるさず、烏のかしら白くなり、馬の角おひたらむ時にかへすべきよしをのたまふ。丹そらをあふぎてなげくに、たちまちにか

山鳥

袋草紙・上

らすのかしらしろく、馬に角おひたりければ、みかどとむるにあたはず、かへしやり給ふなり。

手に結ぶ

袋草紙・上

貫之集云、世間心細く覺て常の心地せざりければ、源公忠朝臣許に此歌をなむよみて送ける間に、殊に

204	199	194	179	166	159	112	102	101	86	77
夜もあけ	しのゝめ	古の	さばへな	つくる	恋しくは	おく山	いふなら	君が代は	朝ごとに	世中を
奥義抄・中	奥義抄・下	袋草紙・上	奥義抄・中	袋草紙・上	奥義抄・中	袋草紙・上	袋草紙・上	奥義抄・中	袋草紙・上	和歌初学抄
<p>病になりておもく成りにけり。手にむすぶ（二句以下略）かへしせむと思へど、急ぎしもせぬ程に失にければ聞驚て哀がりて、彼送歌に返よみ加へて愛宕に誦経せさせて、河原にて焼せけるとぞ。</p> <p>ほどなき事には イナツマ ヒマユクコマ</p> <p>佛御歌</p> <p>是は行を勤てくるしかりければ、暁方にまどろめる夢に、小僧枕上に有りて云ける歌也。</p> <p>經云、方四十里の石を三年に一度梵天よりくだりて、三銖の衣にて撫に盡を爲二一却一。うすくからき衣なり。このころをよめるなり。天人によそへて殿上人のきぬをもあまの羽衣といふ。（略）</p> <p>弘法大師</p> <p>かくばかりだらまをしれる君なればたゞきやたまでもいたるなりけり <small>ベキカナイ</small></p> <p>是答歌也。其本歌云、いふならぬ（二句以下略）</p> <p>亡者歌</p> <p>蛇道に落之由ヲ示て息子ノ夢ニ見云々。</p> <p>文集に、蕭々暗雨打レ窓聲といふ事をよめるなり。是は上陽人のことなり。（略）</p> <p>北野御歌 造るとも（略）是圓融院御時内裏焼亡、造宮之間新造之裏板ニ蟲囀歌云々。</p> <p>さばへなすと云ふ事、日本紀云、天照大神の御孫皇孫命を葦原の中津國の主とせむとおぼすに、かの國に螢火光神および蠅聲邪神おほかりといへり。たとへば夏のはへのちりみだれたるやうに、あしき神のあるなり。これをはらへなごめむとて六月祓はするなり。（略）</p> <p>後拾遺末代規模集也。雖レ然彼時有三種々誹訪ニ云々。先序別様云々。次頼綱歌無二指事一、多人レ之云々。予案レ之不審也。件人歌四首也、皆以染二肝膽一。是尊レ耳卑レ目之誤歟。</p> <p>萬葉には明々とかけり。あけゆくこゝろ也。</p> <p>きつとはきつねなり。かけとは鶏也。くだとは家をいふとぞものしれりし人は申し侍りしかど、はじめに宿とよみて又家の鳥といはむこといかゞ。もしくだはくづといへるにや。五音の字也。くづにはとりとよめるにやともきこゆ。</p>										

207	おもひ草	和歌一字抄	不留 来不留恋 金葉上 俊頼
214	都にて	奥義抄・上	二十二 盗古歌證歌 餘證歌在二字抄、仍不注之。
220	あまの原	奥義抄・上	十九 秀歌體
			いにしへのよき歌
			世のなかを（二句以下略）天の原（二句以下略）
			貫之・躬恒はなかくろの上手也。今の人のよむは此人の流也。
224	秋風に	奥義抄・下	これは蘇武が胡国にとらはれたりしに鴈のあしにふみをつけて本國におこせたりと云ふ事のある也。かりをばつかひともよめり。それも此ゆゑなり。
229	薄墨に	袋草紙・上	於二或所一、人々歌讀二右衛門尉孝善詠云、鶯の初音や（三句以下略）住吉神主國基在二此座一。已秀歌被レ讀之由ヲ存不安有て、其夜不食二成て、無二他事一案和歌一。拟うす墨に書玉札とみゆるかなと云歌は讀也。其後人々を招て、出二歸鴈題一、取二出此歌一。人々褒譽、仍散二遺恨二云々。
240	みるからに	奥義抄・中	もろこしには、異國のつねにかたぶけむとするにおちて、和親のちぎりをなさむがために、女御を一人胡國の王につかはさむとするに、三千のたぐひみなしも御覽じつくさねば、繪かくものをつかはして、おのゝのかたちをうつして、わるからむをつかはさむとするに、こと女御たちは畫師におほくの金をとらせつゝ、かたちをうつしくかかせけるに、王昭君といひける女御の、世にすぐれてうつしくかりければ、わがかたちをたのみてまひなひもせざりければ、これ一人をあやしげにかけりければ、中にわろしとて胡國へつかはせるをくいかなしむことかぎりなかりし事どもなり。
249	なき人は	奥義抄・中	伯牙鍾子期といひて二人の琴の上手ありき。鍾子期しぬる時に、伯牙き、しりたる人あるまじければよしなしといひて、琴のを、たちてその、ちひかざりしことをよめるなり。
255	しでの山	奥義抄・下	（略）問云、ほと、ぎすはしでの山をすぐる鳥なれば、人などにおくれて世中なげかしく思ひける時よめる歌にや。（略）答云、是義も故なきにあらず。題しらぬ歌にて侍るぞあやしき。但、古集共には故

260	時雨とぞ	袋草紙・上	ある歌もことはからぬ多かり。 亡者歌 義孝少將 しかばかり契りしものを渡り川歸る程には忘るべしやは 是は死去すとも、しばらくとかなかせそと云ひけるを、忘にければ妹女ノ夢ニみける歌。 しぐれとは（二句以下略） 昔契ニ蓬萊宮裏月一 今遊ニ極樂界中風一 是賀縁阿闍梨之夢ニ見也。 二十二 盜古歌證歌 後拾 我身には（二句以下略） 江侍從 稻荷御歌 長き世の（二句以下略） 是は近年之事也。或僧聊有ニ相論之事一、稻荷ニ百日參詣祈念する夢に見る也と云々。 かしこきひじりとてすすず。空也聖人の歌 ひとたびも（二句以下略） 空也上人歌 一度も（二句以下略） 書ニ市門一歌也。 佛御歌 此終りの歌は貧しき女、清水寺に百日參り、泣々祈念する夢に御帳中より小僧出來て云ける歌也。 かざしとは狩するに鹿にみえじとて柴などを折りてまへにたつるなり。（略）拾遺にも、 ぬす人の（二句以下略）とよめり。舞人陪從などのかざしも一雙のものはおなじ。花をかざしぬればこの心になへり。又かざすとはかくすと云ふ事にや。集云、かざすとも（二句以下略）とよめり。かの
178	我身には	奥義抄・上	
304	長き世の	袋草紙・上	
327	一たびも	奥義抄・上	
		袋草紙・上	
330	梅の木	袋草紙・上	
342	ぬす人の	奥義抄・中	

404	381	371	359	353	351	347
天の戸を	五月闇	数しらず	たのめつ、	いかでかく	陸奥の	初春の
奥義抄・中	奥義抄・上	奥義抄・下	袋草紙・上	奥義抄・中	袋草紙・上	奥義抄・中
<p>かり人もぬすびともかくれむとすることなればかなひてきこゆ。 これはゐなかにこがすひるものは、正月はつねの日著といふくさは、きにしてこやをはく也。いはひ てすることなれば是をほめてたまは、きとはいふ也、是をばいはひのものにして、年のはじめには人も まづとるものにてあれば、手にとるからにいのちなむのぶるとよめり。ゆらぐとはしばしと云ふ事也。 しばしとはとゞまる心也。とゞまるはのぶる也。たまのをとはいのちを云ふ。たましひのをと云也。又 物をほめてたまという事あり。(略)</p> <p>大様意ニ染ぬる事ニハ宜歌出来者歟。然者道雅三位ハいと歌仙とも不レ聞。齋宮秘通間歌多秀逸也。 (略) 此外不レ聞者也。思まゝの事をば陳、自然に秀歌にして有也。(略) 此齋宮三條院第一皇女也。密 通の由風聞して自レ上まもりを被レ付難レ通之間戀慕歌也。或人露顯之後宮出家。又身大瘡共多出薨去 と云々。</p> <p>法華經云、不レ覺ニ內衣裏ニ有ニ無レ價寶珠一の心なり。佛道にいるをば、かの玉のありとするにたとふ る也。</p> <p>(略) 於レ有ニ讀人不レ知皆は無レ疑作歌也。(略) 又此集有ニ不審一。(略) 又業平集歌、有ニ三一首一。 皆後撰歌也。所レ謂伊勢の海に(略) たのめつ、(略) 宵のまに(略) 是等也。但、此歌等無ニ伊勢物 語一。業平集并後撰之失歟。又頼めつ、の歌在ニ古今集一。躬恒歌云々。</p> <p>是は拾遺に、つみたむることのかたきは鶯の聲するかたのわかななりけり といふ歌を思ひてよめるな り。</p> <p>静範配流之時、兼房朝臣のよみてめしかへさる、歌 さ月やみ(二句以下略) わたくしのいかりをもな だむ。</p> <p>是はもろこしに孟嘗君といひける人、おほやけにたがひ奉りて、隣国へにげてゆきけるに、よなかばか り函谷關に至りぬ。かのせきは鳥のこゑをき、て後にせきのとをばあくるところにて、よふかくていづ べきやうもなかりければ、あひしたがへるもの、なかに、鳥のこゑまねぶ人のありけるしてなかせたり ければ、あけぬなりとて關の戸をあけたるより、にげてゆきける事のあるを思ひてよめるなり。</p>						

414	見し人も	袋草紙・上	花山院御時、中納言義懷外戚、惟成辨近習臣、各執二天下之權一。而院竊出二内裏一幸二花山一出家。兩人聞出追參上。院已爲二比丘一。惟成本鳥ヲ切。又義懷語云、在二外戚一、執權御座つるに、更爲二外人一 交二世間衆一、見ぐるしかるべし。早出家。義懷存之由稱て、同出家。依二人教訓一したればいかゞと世人思けるも始終尊くて過云々。飯室に住て詠歌、
419	もろ共に	奥義抄・中	みし人も（二句以下略） 法華經の三車のたとへの心なり。一味の雨は法華經なり。われはのりの雨にあひにきとよめり。經文を題にえてよめる歌はしるさず。
426	たゆみなく	袋草紙・上	臨終歌（略） 河内重如號二山次郎判官代一。 たゆみなく（二句以下略） 是も死なむとしける時よめる也。

〈表Ⅱ〉

▼表中の〈袋〉は袋草紙、〈奥〉は奥義抄、〈和一字〉は和歌一字抄を、また／は本文異同の認められないことを示す。

第二種七卷本系 宝物集		宝物集・清輔著歌学書の一致歌本文異同		宝物集・清輔著歌学書の一致歌収録勅撰集	
歌番号	初句	宝物集・清輔著歌学書の一致歌本文異同		歌集名・部立・歌番号	宝物集との本文異同
1	殿守の	／	五句 思はざりけり —— 思はざりけれ〈袋〉	拾遺・雑春・1055	／
5	去年みしに	／	五句 思はざりけり	金葉二度本・雑上・524	五句 思はざりけれ —— おもはざりけれ
8	住人も	／	五句 鳴なる —— なくなり〈奥〉	後拾遺・秋上・258	／
11	翁さび	／	初句すべらぎの —— すめろぎの〈奥〉	後撰・雑一・1076	／
13	大井河	／		後拾遺・冬・379	／
14	すべらぎの	／			／

102	101	86	77	76	72	62	59	58	39	29	21	20	15
いふならく	君が代は	朝ごとに	世中を	手に結ぶ	山鳥	逢までと	宵のまに	君が代は	ぬれてほす	おもひ兼	玉くしげ	百さかや	をしてるや
初句	五句	／	／	五句	／	五句	／	／	下句	／	三句	初句	三句
いふならく——いふならぬ〈袋〉	いはほならなん——いはほなるらむ〈奥〉			世にもすむ哉——世にこそ有けれ〈袋〉		折也けれ——命なりけれ〈袋〉			争か我は千代を経ぬらん——いつかちとせをわれはへにけむ〈奥〉		すへざりき——すゑざりし〈袋〉	百さかや——もゝさかに〈奥〉	東路の——あづまなる〈同〉
なし	拾遺・賀・299	拾遺・哀傷・1341	後拾遺・雑三・1013	拾遺・哀傷・1322	後拾遺・雑四・1076	後拾遺・恋一・642	後拾遺・賀・449	なし	古今・秋下・273	詞花・雑上・337	金葉三奏本・秋・165	拾遺・哀傷・1347	古今・雑上・894
	／	／	／	五句	／	作者	／	／	下句	／	三句	初句	初句
				世にもすむ哉——世にこそありけれ		右大臣頼宗——堀川右大臣			争か我は千代を経ぬらん——いつかちとせを我はへにけむ		すへざりき——すゑざりし	百さかや——ももくさに	難波の浦に——なにはのみつに
											なき人をしれ——なき身とをしれ	さかそへて——くさそへて	をしてるや——おしてるや

166	159	112	179	194	199	204	207	214	220	224	229	240	249	255	260
おく山の 恋しくは つくりとも	／	／	さばへなす	古の	しのゝめの 夜もあけば	初句 夜もあけば ／ 									

278	我身には	五句	おもはざりける —おもはざりけり△奥▽	後拾遺・哀傷・588	四句	ふるさとに—ふるさとの
304	長き世の	／		詞花・雑下・409	五句	おもはざりける—おもはざりけり
327	一たびも	／		拾遺・哀傷・1344	作者	よみ人しらず—稻荷御歌
330	梅の木	／		新統古・釈教・816	五句	宿を—やどりに
342	ぬす人の	五句	名をやながさん —名をやかざ、む△奥▽	拾遺・雑下・560	五句	名をやながさん—名にやけがれん
347	初春の	／		新古今・賀・708	作者	滋賀上人—よみ人しらず
351	陸奥の	(二句のみ掲出)		後拾遺・恋三・751	五句	心まどへる—心まどはす
353	いかでかく	五句	忘れざるらん —わすれざりけむ△奥▽	後拾遺・雑三・1024	五句	忘れざるらん—わすれざりけん
359	たのめつ、	(下句なし)		古今・恋二・614	／	
371	数しらず	／		後拾遺・春上・37	／	
381	五月闇	／		後拾遺・雑三・996	／	
404	天の戸を	／		後撰・恋二・621	／	
414	見し人も	二句	とはずなり行 —わすれのみする△袋▽	後拾遺・雑三・1034	二句	とはずなり行—わすれのみゆく
419	もろ共に	三句	山里に—古里に△同▽	後拾遺・神祇・1187	三句	山里に—ふるさとに
426	たゆみなく	二句	心をかくる—頼をかくる△袋▽	金葉二度本・雑下・646 同三奏本・雑下・638	三句	のりしかば—のりしかど

右に表示△表Ⅰ▽した歌学書の本文と吉川泰雄氏蔵第二種七卷本系宝物集(以下本稿では七卷本と表記)との本文を比較すると、両者の表現内容が類似している場合が認められる。

例えば――

・ 8 歌「住人も」の場合

七卷本の筆者は、「住人もなき山里の秋の夜は月の光もさびしかりけり」の詠を掲出するにあたり、次の如く説明を付している。

公任の大納言の「範永たれの人ぞ、和歌の道に名をえたる人哉」とほめ給ふは此うた也。

△卷一・釈迦堂参詣の道行・p. 8▽

この詠、表示△表Ⅱ▽した如く、後拾遺集に「広沢の月を見てよめる」の詞書を付して収録されている。しかし七卷本に記された公任卿の逸話は、後拾遺集の詞書をふまえた内容ではなく、袋草紙の本文を簡明にした内容であるといえる。七卷本の筆者はこの詠を引用するにあたり、袋草紙の注釈を参考にしたと考えてよからう。

・ 14 歌「すべらぎの」の場合

七卷本の筆者は、「まことの宝には金と云物こそ侍れ」と述べ、例歌を一首示して、△宝物の論・金が宝▽ということを説いている。14 歌「すべらぎの御代栄んと東路のみちのく山に金花咲」はその詠である。七卷本の筆者はこの詠を掲出するにあたり、14 歌の前に次の如く記している。

天平勝宝廿一年の春、陸奥より始て砂金参せたりしには、おほやけも、国に能宝出来たりと悦おほしめして、大伴の家持の中納言に

歌めして、詔書侍りけり。

△卷一・宝物の論、金が宝・p. 16▽

七卷本に記された「天平云云」の内容は、奥義抄の内容と類似しているといえよう。ところで、七卷本の筆者は、14 歌の後につづけて「天に五行有。金ぞ中にゐたる。」と説いている。七卷本の筆者は、まず「五行」に着目することによって、「金」という語に注意をはらわせ、「金身」「金光明経」「三密の山の金」へと読者の関心を深め、「金の宝なるがゆへに皆金の字を具したる也」と説いているのである。一方、清輔は、表示△表Ⅰ▽した如く、奥義抄では、「五節」のこともふれて、この詠に注を付している。七卷本・奥義抄の両者は、「五行」「五節」というように、全く異なる観点に立つて、「すべらぎの」の詠の注釈をこころみているように受けとめられはする。しかしながら、七卷本の筆者は、奥義抄の「五節」をふまえての注釈を念頭に置きながら、「五」という数字を意図的に用いて、△金が宝▽ということとを説こうとしたとはいえないか。

・ 21 歌「玉くしげ」の場合

七卷本の筆者は、十二首の和歌を掲げて△宝物の論・子が宝▽ということとを説いている。21 歌「玉くしげかけごに塵もすへざりき二親ながらなき人をしれ」は、その十二首中の一首で、次の如き詠歌事情を付して収録している。

あやしき女の、実源律師を請じて、かたの様なる仏事をして、手箱を一布施にしたりけるを、あけてみければ、かくぞよみて入たりける

△巻一・宝物の論、子が宝・p. 30▽
また、この詠は表示△表Ⅱ▽した如く、金葉集に次の詞書を付して撰入されている。

「律師実源がもとに女房のほとけくやうせんとてよばせはべりければ、まかりて見ればこともかなはずげなるけしきを見て、いそぎくやうしてたちけるに、すだれのうちより女房てづからきぬひとへとてばことをさしいだしたりければ、従僧してとらせてかへりてみれば、しろかねのはこのうちにききていれたりけるうた」(二度本・雑下・610)金葉集の詞書と袋草紙の注釈文・七巻本の本文を比べてみると、

三者ともその内容は類似しているのである。藤原清輔は、金葉集(二度本)を書写していることからも、この詠を袋草紙に収録するにあたっては、金葉集を資料としていたと考えられる。一方、七巻本の筆者の場合は、この詠を例歌として撰入するにあたって、袋草紙のみを利用していたかというところともいえない。七巻本の筆者は、袋草紙・金葉集——二度本よりむしろ三奏本に依ったか——のいずれをも参考にしつつ、その内容を簡明にし、掲出したと考えるべきであろう。

・72歌「山鳥」の場合

七巻本の筆者は、△宝物の論・命は宝にあらず▽ということを説くにあたって、「増基法師熊野に久しく籠て侍りける比、頭白き鳥有ければよめる」と詠歌事情を述べた上で、72歌「山鳥頭もしろく成りにけり我帰るべき時やきぬらん」を掲出している。この詠歌事情は、後拾遺集の詞書「くまのにまゐりてあすいでなんとしはべりけるに人人

しばしはさぶらひなむや神もゆるしたまはじなどいひはべりけるほどに、おとなしのかはのほとりにかしらしろきからすのはべりければよめる」をふまえて記されていることは明らかである。

ところで、七巻本の筆者は、72歌の詠歌事情を述べるに先立ち、次の如く記しているのである。

秦始皇が六ヶ国を打したがへて、燕の太子丹を召籠て置たりしに、いとまをこひければ、せめてとらせじが為に「馬に角おひ鳥の頭白く成たらむ時に、汝にいとまはとらすべし」と云ければ、燕丹仏天を祈念しければ、馬に角おひ、鳥の頭しろく成りたりければ、秦皇驚て、いとまをとらせてけり。

△巻一・宝物の論、命は宝にあらず・p. 47▽
七巻本・奥義抄両者を比べてみると、表現上、若干の相違が認められるはするものの、七巻本の記述「秦始皇云云」は奥義抄をふまえたものと考えられよう。しかし、七巻本の筆者は、奥義抄の「丹そらをあふぎてなげくに」を「燕丹仏天を祈念しければ」と異なる表現を用いているのである。山下哲郎氏は論稿「法談と和歌——宝物集収録歌の検討——」△駒沢大学大学院国文学会『論輯』19所収▽において、宝物集が法談書としての性格を有していると指摘していられる。「そら」を「仏天」に、「なげく」を「祈念す」と記していることは、山下哲郎氏のご指摘の如く、宝物集を法談書として編纂しようとした七巻本の筆者の考えの表われといえるかもしれない。いずれにせよ、七巻本の筆者は奥義抄を精読し、奥義抄に収録されている和歌の中から、法談書にふさわしい例歌を抄出していたのである。その上で、注釈文も

その例歌が釈教歌としてうけとめられるよう、奥義抄の本文を改めて引用していたのであろう。

・101歌「君が代は」の場合

七巻本の筆者は「八地獄の中に苦患の軽重あり。（略）命の長短もまたくかくのごとし。」と述べ、さらに次の如き本文とともに

101歌「君が代は天の羽衣まれにきてなづともつきぬいはほならなん」を例歌として掲げて、△六道・地獄▽を説いている。

命の長き事は一中却也。出離のいつと云事をしらず。久しさ、さまぐに侍り。四十里のいしを三朱の天衣をもつて三年に三度なでんに、つきうせんを一却とも申。

△巻二・六道、地獄・p. 68▽

七巻本の筆者は、「三鉢」を「三朱」、「三年に一度くだり」を「三年に三度なでん」と、奥義抄に記すところと異なつた表現を用いている。ただし、この比喩、菩薩瓔珞本業経・佛母品第五には、「譬如一里二里乃至十里石。方廣亦然。以天衣重三鉢。人中日月歳數。三年一拂此石乃盡。名一小却。」とある。⁽⁵⁾ なお、宝物集の伝本のうち、大日本仏教全書本（七巻本）では「三鉢」と表記していることから、七巻本の筆者が「三鉢」を「三朱」と書き誤つたとも考えられはする。しかし、経典に「一拂」と説かれているところを、奥義抄では、「一度くだり」と、七巻本では「三度なでん」と、両者ともに、経典を忠実に引用しているとはいひ難い。それ故、今後は、奥義抄・七巻本・菩薩瓔珞本業経の各伝本の比較・検討も課題となるであらう。⁽⁶⁾

ともあれ、七巻本の筆者は、「一却」の意を説くにあたつては、奥

義抄の注釈をもふまえていたといえよう。

・112歌「おく山の」の場合

七巻本の筆者は、△六道・畜生道▽を説くにあたつて、112歌「おく山の行衛もしらぬ谷底に哀いつ迄あらんとすらん」を掲げ、次の如く述べている。

高遠の大武の、ちく生道に落ちたるよし、子の夢に見えけるうたどぞ、あはれに侍る。

△巻二・六道、畜生道・p. 73▽

またこの詠、清輔は統詞花集（哀傷・440）に「大武高遠身まかりける跡に、子息の夢に、蛇道になんおちたるとてよみける歌」という詞書を付して収録している。右に記した如く、七巻本に説くところは、袋草紙・統詞花集（詞書）に記された詠歌事情を簡明にまとめた内容である。七巻本の筆者は、112歌を△畜生道▽の例歌として掲げるに当たり、袋草紙・統詞花集両者を編纂の資料としていたといえよう。⁽⁷⁾

・166歌「つくるとも」の場合

七巻本の筆者は、「第五に、怨憎会苦と申は、よろづにつけてもの恨みをいだくを申ためる也。」と△六道・人道▽を説き、166歌「つくるとも又もやけなん菅原やむねのいたまのあらんかぎりは」を、次の如き詠歌事情を付して、掲出している。

また、その頃、おほくの内裏やければ、一条院をつくられけるに、裏板に虫くひたりける歌

△巻二・六道、怨憎会苦・p. 101▽

ところで、藤原清輔は袋草紙に収録したこの「つくるとも」の詠

を、その後撰集した続詞花集（神祇・382）では、「或人、此歌は一条院御時内裏のやけたりけるをつくられるあひだ、御殿のうらいたにむしのくへりける北野の御歌となん申す」と、歌の後に記している。⁽⁸⁾

なお、七卷本では、作者名を明記していない。袋草紙と続詞花集両者を比べてみると、袋草紙では「圓融院御時」、続詞花集では「一条院御時」と年時表記に相違が認められる。続詞花集の詞書は、「一条院御時に内裏が焼失したため、一条院の御世に再建した」とも「既に焼失してしまっていた内裏を一条院の御世になって再建したともうけとめられよう。またこの詠、大鏡（時平伝）には、「内裏やけて、度々つくらせ給に、円融院の御時の事なり」とある。七卷本の筆者は、袋草紙・続詞花集・大鏡の三者を比較した結果、詠歌年時にはふれず、「一条院（藤原伊尹の住居か）を再建した時の歌として掲出したのではあるまいか。山田昭全氏が、宝物集は大鏡を模した作品であると指摘していられる。大鏡が七卷本編纂に重要な位置をしめていたことは疑う余地はない。しかし、七卷本の筆者は、大鏡と同様、清輔の著作類をも精読したうえで、七卷本編纂の資料として用いていたことがこの場合からも明らかにされよう。

・224歌「秋風に」の場合

七卷本の筆者は、「第六に、愛別離苦と申は、わかれをおしむを申侍るなり。」と述べ、人道の五苦の一つ愛別離苦を説いている。さらに七卷本の筆者は224歌「秋風に初かりがねぞ聞ゆなる誰が玉章をかけてきつらん」を掲出するにあたり、次の如く述べ、さらに「鴈書の事、歌にもおほくよみて侍るめり。」と記している。

蘇武が胡国にまかりて、十九年まであるさにかへらざりけんも、都はこひしく侍りけんかし。漢王、上林苑といふ所にてあそびたまひけるに、雁の足に文をつけたりけるを見たまひければ、蘇武が文なりけり。いまだいきてありけりとて、めしかへされにけり。

△卷三・六道、愛別離苦・p. 116▽

七卷本に説くところは、奥義抄の内容をさらに詳しく述べたもので、愛別離苦を説くにふさわしい表現であるといえよう。七卷本の筆者は、奥義抄によるまでもなく、漢書・蘇武伝に記された雁書のご故事は熟知していたにちがいない。しかしながら、古今集・秋上に「これさだのみこの家の歌合のうた」という詞書を付して収録されている224歌を、蘇武の故事と密接に結びつけて掲出していることは、七卷本の筆者が奥義抄を編纂の資料として利用していた可能性の高いことを示しているといえよう。

・249歌「なき人は」の場合

七卷本の筆者は、愛別離苦を説くにあたって、生別の苦と死別の苦に大別し、各々例歌を掲出している。249歌「なき人はをとづれもせで琴の緒をたちし月日ぞかへりきにける」は死別の苦の例歌として示されている三三首のうちの一首である。なお、この詠、七卷本には、後拾遺集・雑一の詞書、作者名ともに掲出されているので、七卷本の筆者は、後拾遺集を七卷本編纂の資料としたともいえる。⁽⁹⁾しかし、七卷本の筆者は、249歌の後に次の如く注を付しているのである。

鍾子期うせにしかば、伯牙、琴のををたちし心なるべし。

△卷三・六道、愛別離苦・p. 121▽

右の注は、奥義抄の記述を簡明にしたものと考えられる。即ち、七卷本の筆者は、後拾遺集を編纂の資料としてはいるが、奥義抄の注釈内容をも精読した上で、例歌の掲出にあたってはその注釈をも引用したのであろう。

・260歌「時雨とぞ」の場合

260歌「時雨とぞ千種の花はふりまがふなにあたる」とに袖ぬらすらん」は、愛別離苦の死別の苦を説くための例歌として示された一首である。

ところで、七卷本の筆者は、260歌を掲出するにあたって、次の如く詠歌事情を記している。

一条殿撰政伊尹御子前少将拳賢・後少将義孝とて、時めき給ふ公達おはしき。疱瘡をわずらひて、同じ日にうせたまひにけり。(略)賀縁阿闍梨とてたのみ給ひたりける僧の夢に、こゝろよげにて、かくぞよみ給ひける。

時雨とぞ千種の花はふりまがふなにあたる」とに袖ぬらすらん

昔契蓬萊宮裏月 今遊極楽界中風

△卷三・六道、愛別離苦・p. 124▽

ところで、260歌は、後拾遺集、義孝集、大鏡(伊尹伝)、今昔物語集(卷二・三九話)などにも収録されているが、後拾遺集と歌本文を比べてみると表示△表Ⅱ▽した如く、作品によって異同が著しい。また七卷本・袋草紙では、260歌の後に「昔契云云」の漢詩句が記されているが、その漢詩句も作品によつては欠落したり、260歌と漢詩句との間に配列の異同が認められるのである。七卷本・袋草紙両者を比べて

みても、七卷本には、袋草紙にはみえない義孝の死因が述べられ、この点では、両者の間に異同が認められる。しかし、和歌の後に、漢詩句を配列していることから考えると、七卷本の筆者は、袋草紙を編纂資料として利用していたものと考えられる。しかしながら、漢詩句を収録していない後拾遺集を除くと、七卷本の筆者が袋草紙以外の作品をも編纂資料として利用していた可能性は、充分考えられよう。こうしたことから、七卷本編纂にあたって、どのような資料が利用されたかという問題については、さらに引き続き検討する必要があることを、茲に確認しなければなるまい。

・414歌「見し人も」の場合

七卷本の筆者は、「仏になる道ひとつにあらず。」と、浄土に往生する道として十二門を開示している。その第十の門「善知識にあふ」とを説くために、七卷本の筆者は例歌を五首掲出している。その最初の例歌である414歌「見し人もとはずなり行山里に心ながくもきたる春かな」は、次の如き詠歌事情を付して掲出している。

義懷中納言は、花山院のいづくともなくうせ給ひしかば、惟成弁とふたり、出家遁世してこもり給ひにけり。中納言は飯室と云所にて、花を見てかくぞよみたまひける。

△卷七・善知識・p. 318▽

ところで、414歌、後拾遺集・雑三には「法師になりてすみはべりけるところにさくらのさきて侍けるを見て」という詞書が付されている。この詞書と七卷本に説くところを比べてみると、七卷本には、後拾遺集(詞書)には記されていない義懷の出家に至る事情の述べられ

ていることがわかる。七巻本の筆者は「吾朝にも、ことにあひて世をそむける人、おほく聞えし也。少々申侍るべし。」と述べた上で、例歌を掲出してゐる。即ち、七巻本の筆者は、後拾遺集の詞書をそのまま記すことよりも、袋草紙に述べられてゐる義懷出家のいきさつを簡明に記すことによつて、「ことにあひて世をそむける人」の例歌として、44歌は、より一層適切な例歌になり得るものと考えたのではあるまいか。なお、44歌の三句、後拾遺集・袋草紙では、「古里」とあるが、七巻本「世をそむける人」という表現には「山里」の方がより適切といえよう。第二句「わすれのみする」〈袋草紙〉・「わすれのみ行」〈後拾遺集〉を「とはずなり行」と改めたのも同様の理由からか。以上の考察から明らかなく、七巻本と清輔歌学書との一致歌五十一首中十一首については、七巻本に説くところと歌学書の本文は密接なかわりをもつていたことが明らかとなる。

III

次に、五十二首の一致歌のうち、七巻本と清輔歌学書両者の間に表現上の共通点が見出せない四十首についても、両者のかかわりについて、検証してみる。

例えば――

・76歌「手に結ぶ」、77歌「世中を」の場合

七巻本の筆者は「維摩經の十喻にも、此身は水にやどれる月のごとし、入月のごとし、芭蕉のごとし、夢のごとしなど申ためれば、諸行

を空と観じて、仏法を宝とおぼすべき也。維摩經の十喻の心、昔今の歌にもよみて侍るめり。」と説き、五首の和歌を掲出してゐる。76歌「手に結ぶ水にやどれる月影の有かなきかの世にもすむ哉」、77歌「世中を何にたとへん秋の田のほのかにてらす宵のいなづま」は、そのうちの二首である。ところで、76歌には拾遺集・哀傷に「世の中心ほそくおぼえてつねならぬ心地し侍りければ（略）このあひだやまひおもくなりけり」という詞書を、77歌には後拾遺集・雜三に「よのなかをなにととへむといふふることをかみにおきてあまたよみはべりけるに」という詞書を、各々付して収録されている。勅撰集の詞書からは、76歌・77歌両首ともに、維摩經十喻の詠とは受けとめがたい作である。なお、76歌「手に結ぶ」は、拾遺集では詞書とは別に、「このうたよみ侍りてほどなくなりにけるとなん家の集にかきて侍る」という注が歌の後に付されている。この注からも、この詠を維摩經十喻の作とうけとめることはできない。一方、袋草紙では、表示Ⅷ表ⅠⅤした如く、拾遺集の後に記された注「ほどなくななりける」をふまえて、「急ぎしもせぬ程に失せにければ」と述べた上で、愛宕にて誦経した旨、記されている。さらに、清輔は、76歌につづけて慈心上人、覚超僧都、実源律師、膽西上人の和歌を掲出してゐる。また、「和歌は狂言綺語也」として、和歌を詠まなかつた恵心僧都が、後には、「和歌は観念の助縁と成りぬべかりけり」という心境に到つた逸話も記している。即ち、七巻本の筆者は、袋草紙の恵心僧都の和歌に付された前掲の注釈をもふまえて、76歌を釈教歌とうけとめたのであろう。また、袋草紙の注釈および拾遺集の後注をふまえて、第二・三

句「水にやどれる月影」から、やがて西の空へと消えゆく月——即ち「入月」の様を連想し、76歌は維摩經十喻の作と、理解したのではあるまいか。ただし、維摩詰所説經・方便品には「入月」は勿論、「水中月」を此世の我が身のはかなさと結びつけては説いていない。七卷本の筆者が維摩經十喻を誤ってうけとめていたとしても、袋草紙を精読した上で、この76歌を「諸行を空と観じて、仏法を宝とおぼすべき也」ということを説くにふさわしい例歌であると考え、掲出したのであろう。

一方、77歌「世中を」が維摩經十喻の詠として掲出されたのは、第五句「宵のいなづま」によると考えられる。また、表示△表ⅠⅤした如く「ほどなき事には イナヅマ」と注を付している和歌初学抄をも参酌して、七卷本の筆者は「諸行を空と観じて、仏法を宝とおぼすべき也」ということを説くにふさわしい例歌であると判断したのかもしれない。

・327歌「一たびも」、330歌「梅の木の場合」

327歌・330歌の両首は、七卷本の筆者が「いはんや、往生極楽の望みにおゐてをや。豈三宝にいのらざらんや。仏法僧のうた、おほく侍めり。一兩首申べし。」と説き、五首の和歌を掲出しているうちの二首である。327歌「一たびも南無阿弥陀仏と云人の蓮の上にのぼらぬはなし」は、奥義抄・袋草紙に、330歌「梅の木のかれたる枝に鳥のゐて花さけく」となくぞわりなき」は袋草紙および続詞花集(釈教)に「まづしき女のきよ水にとしごろまゐりける、御前になくなくふせりける夢に、御帳のうちよりちひさきそうのいでてよみかけける」という詞

書を付して、各々収録されている。七卷本の筆者が、清輔の歌学書や撰集歌集(続詞花集)に撰びあげている327歌・330歌の二首を、△三寶Ⅴの例歌として掲出していることは、注目すべきである。七卷本の筆者が清輔の歌学をも深く理解して、七卷本の編纂にあたっていたことは、この二首を例歌として掲出していることから窺い知れよう。

・353歌「いかでかく」の場合

七卷本の筆者は△持戒・不飲酒Ⅴを説くにあたって、「法華經のたとへにも、まづしき人、珠を得て、衣の裏にかけて、嬉しとおもふほどに、友のもとへゆきて酒をのむほどに、あひて玉をもちたる事をわすれぬ。至親友家、酔酒而臥と云は是なり。(略)繋着內衣裏の心、歌にもおほく侍るめり。」と述べ、五首の和歌を掲出している。353歌「いかでかく花の袂をたちかへてうらなる玉を忘れざるらん」は、その中の一首である。この詠、後拾遺集・雜三に「中宮のなしいしあまになりぬとききてつかはしける」という詞書を付して収録されている。

その詞書には、法華經・五百弟子授記品に説く「以無価宝珠 繋其衣裏」をふまえて詠じた作であるとは記されていない。また、後拾遺集・雜六には、釈教歌という見出しをつけ、法華經二十八品和歌が収録されていることから考えても、この詠、後拾遺集では法華經二十八品和歌として撰入されているとはいい難い。以上の点から、七卷本の筆者は、353歌を後拾遺集から掲出したとは考え難い。しかし、後拾遺集からこの詠をもし掲出していたとすると、七卷本の筆者は、353歌の下句「うらなる玉を忘れざるらん」を、五百弟子授記品の「繋其衣裏」の偈と結びつけてうけとめ、その上で、奥義抄の注釈「法華經云

云」を精読することによって、353歌を「あひて玉をもちたる事をわすれぬ」ことを詠じた作、即ち、「繫着內衣裏の心」を詠じた、△持戒・不飲酒▽を説くにふさわしい例歌であるとみなして、掲出したのであらう。

・419歌「もろ共に」の場合

419歌「もろ共に」三つの車にのりしかば我は一味の雨にぬれにき」は、後拾遺集・雑六（釈教）に「故土御門右大臣のいへの女房くるまみつにあひのりてばいかうにまゐりて侍けるに（略）」という詞書を付して収録されている。前述の如く、後拾遺集・雑六の排列を調べてみると、419歌の後には月輪観を詠じた作一首、維摩經十喻の作二首、三界唯一心を詠じた作一首、法華經二十八品和歌五首という順に排列・収録されている。この排列状況から判断すると、419歌は法華經和歌とは認めがたい。しかしながら、七卷本の筆者は、後拾遺集の詞書「くるまみつにあひのりて」から、この419歌を法華經・譬喩品に説くところの「火宅三車」の譬えと結びつけてうけとめていたのであらう。また、七卷本の筆者は、奥義抄の「法華經の三車云云」という注釈をもふまえて、十二門の第十一△法華經▽の例歌として419歌を掲出したのであらう。

なお、紙数の都合上、本稿での全ての考察はひかえたが、七卷本の本文と清輔歌字書の本文とを比べてみると、表現上からは、両者の間に若干の異同が認められはするが、共通する故事などが両者に引用されている場合もある。

例えば29歌「おもひ兼」の場合――

七卷本の筆者は、「唐の玄宗皇帝の、楊貴妃と申后に思ひつきて（略）朝政をもしたまはざりければ、安祿山と云人（略）楊国忠をころしつ。（略）楊貴妃をも殺してげり。（略）長恨歌と申文に、こまかには申たるなり」△卷一・宝物の論、子は宝にあらず・p. 35▽と述べ、長恨歌をふまえた和歌四首を掲出した上で「安祿山、楊国忠をうちて、玄宗の御門をばおひこめ奉りて、天下をつかさどり侍りけるに、如何成事有けん、安慶緒と云子にころされけり。（略）是等を承おりは、人の子、おやの為に宝と申べくも侍らざるめり」△同・p. 37▽と記し、△宝物の論、子は宝にあらず▽ということを書いてゐる。

ところで、29歌「おもひ兼別し野べを来てみれば浅茅が原に秋風ぞふく」は、奥義抄では、後拾遺集・雑三・1015「こひしくはゆめにも人を見るべきをまどうつあめにめをさましつ」の詠に付された注釈中に引用された歌である。また、表示△表Ⅱ▽した如く、金葉（三奏）・詞花両集には、ともに「長恨歌のころをよめる」という詞書を付して収録されている詠である。七卷本・奥義抄両者も、ともに「長恨歌」とのかかわりを指摘している。29歌を例歌として掲出するにあたって、七卷本の筆者は奥義抄をも精読の上、利用したと考えられる。しかし、七卷本の筆者は、29歌を清輔の著した奥義抄からではなく、あるいは、清輔の父藤原顕輔によって撰集された詞花集から撰歌・掲出したのかも知れない。七卷本に掲出されている和歌四二八首のうち一七首は詞花集に収録されている詠であることから、その可能性は十分考えられよう。

即ち、29歌の場合の如く、七巻本と清輔歌学書との両者の間に表現上の異同が認められる場合は、清輔以外の六条家の人々——即ち、顕輔・顕昭らの撰歌歌集・歌学書類とのかかわりにについても検証することとが、七巻本編纂資料研究上の問題点であることを、茲に確認せねばならない。

IV

以上考察から、次のことがいえよう。

七巻本の筆者は、七巻本を編纂するにあたって、清輔歌学書を精読したうえで、

- ① 歌学書に記された内容を簡明にし、しかも歌学書の表現を残しながら引用している
 - ② 歌学書の表現は残さないが、その注釈内容をふまえて例歌を掲出している
 - ③ 勅撰集から、釈教歌としては詠まれていない歌を、仏敎の教えを説くにふさわしい例歌として掲出する場合、清輔歌学書の注釈を吟味・検討した上で掲出している
- という姿勢が認められるのである。

先学のご指摘の如く、七巻本宝物集に例歌として掲出された和歌は、宝物集が法談書としての性格を持つために様々なジャンルの作品から撰歌されたものである。しかし、それらの和歌を収録している作品の全てが、仏敎の教えと深くかかわりを持つてゐるわけではない。

藤原清輔の歌学書類もまた同様である。にもかかわらず、以上考察してきたところから明らかな如く、七巻本の筆者は、清輔の歌学書類を精読することによって、釈教歌としては詠まれていない歌までも、仏敎の教えにひきつけ、うけとめようとしているのである。

即ち、七巻本宝物集の世界は、清輔歌学書の影響をうけて形成されていることを、確認せねばなるまい。

注

(1) 宝物集諸本の分類については、小泉弘氏「古典文庫283解説」・山田昭全氏「新日本古典文学大系・宝物集解説」・和歌大辞典を参照。なお、本稿掲出の宝物集本文・歌番号・頁数は、新日本古典文学大系本によった。

(2) 和歌大辞典によれば、各歌学書の成立年時は次の如くである。

『奥義抄』 天治元(1124)〜仁平元(1151)、『袋草紙』 保元二(1157)〜保元三(1158)頃、『和歌初学抄』 仁安年間(1166)〜1169以前か。

(3) 松田武夫著「清輔本金葉集の出現——金葉集研究の回顧と展望——」△『専修国文』第十二号所収△参照。

(4) この詠、三奏本金葉集には、次の如き詞書を付して収録されている。律師実源がもとに女房の仏供養せむとてよばせ侍りければまかりたるに、手箱を布施にしたりけるをかへりてみればかきていれたりける歌△三奏本・雑下・601▽

七奏本の本文は、二度本の詞書より、むしろ三奏本の詞書に、より類似しているともいえよう。

(5) 大正新脩大藏經No.1485『菩薩瓔珞本業經』p.1019 a.16~a.19参照。

(6) ・なお、宝物集諸本のうち、九冊本(古典文庫283所収)では「三朱(鉢か)」と、康頼自筆本「一巻本」(大日本仏敎全書所収)では「三朱」。

新日本古典文学大系本の脚注には「朱は銖が正しい」とある。

・大正新脩大藏經『菩薩瓔珞本業經』の脚注には「三銖」の諸本間の異同については記されていない。

(7) この詠、現存する高遠集（桂宮本叢書・私家集大成Ⅰ・新編国歌大観3）にはみえない。万代集³⁵⁷には下句「哀いくよをすまむとすらん」とある。和歌大辞典によれば、万代集の成立は、宝治二（1284）、その後改修が行われたらしい。

(8) 続詞花集の成立は、永万元年（1165）といわれる（和歌大辞典等参照）。

「つくるとも」の詠、続詞花集の排列状況からすると、贈答歌の返歌として、堀河が詠じた和歌一首のうちの一首とも受けとめられる。排列の上から、この詠、吟味が必要であろう。

(9) 円融院、天徳三（959）→正暦二（991）、三十三歳崩。安和二（896）→水観二（984）在位。

一条院、天元三（980）→寛弘八（1001）、三十二歳崩。寛和二（986）→寛弘八（1001）在位。円融天皇第一皇子。

・『袋草紙注釈』△塙書房▽では、島津忠夫氏は『百練抄』に貞元元年（976）に内裏が焼失し、同二年七月二十八日に新造内裏に遷られたことが記されていることを指摘された上で、続詞花集が袋草紙と異なり、『一条院御時』としたことは不審」と注を付していただける。

(10) 新日本古典文学大系・宝物集解説参照。

(11) 後拾遺集・雑一・894の詞書「ははにおくれはべりて又のとしはてのわざなどすぎつれづれにはべりけるゆふぐれに、ちりつもりたることなどおしのごひてひくとはなけれどいまはほどなどすぎにければをりをりならしけるを、をばなりける人のあひすみけるかたよりこのねきけものぞかなしきなどいひにおこせて侍けるかへりごとによめる」とあり、七巻本とは若干、異同がみとめられる。なお、この詠、蜻蛉日記にもみえる。

(12) 七巻本に掲出された和歌四二八首中、八十八首は後拾遺集に収録されている。なお、七巻本と後拾遺集との一致歌の調査は、黒田彰子氏

が論稿「宝物集の和歌——上、出典をめぐって——」△『国語国文』第62巻第6号所収▽で表示していただける。七巻本と後拾遺集とのかわりについても、今後さらに考察する必要があるだろう。

(13) 『江談抄』巻四には「此詩、義孝少将卒去之後、賀縁阿闍梨夢見。」と、「大鏡」（伊尹伝）には「小野宮の実資のおとどの御ゆめに」と、「今昔物語集」（巻十五・四十二話）には「藤原高遠の夢に」と、この漢詩句が詠まれたいきさつは明らかでない。なお、この漢詩句および「時雨とぞ」の詠については『袋草紙注釈』△塙書房▽参照。

(14) おしるるやよさの濱こそ恋しけれ涙をよするかたしななければ 慈心上人 世間に有てかひなき我が身をかくをしまる、人にかへばや 覚超僧都 今朝こそは明けても見つれ玉匣ふたよりみより涙ながれて 実源律師 いにしへも今も伝へてかたるにももりやは法の敵なりけり 麿西上人

(15) 大正新脩大藏經No. 475『維摩詰所説經』方便品P. 539bには「水中月」の喩えは説かれていない。ただし、菩薩行品P. 600aには「有以夢幻影響鏡中像水中月熱時炎如是等喩而作仏事」とある。

千載集（釈教・1224）には、次の詠が収録されていることから、「水中月」を維摩経十喩の一つとくわていた歌人も少なくはなかったのかも知れない。

維摩経十喩・此身如水中月といへる心をよめる 宮内卿永範

すめばみゆにこればかりくるさだめなきこのみや水にやどる月かけ

なお、維摩経十喩の和歌については、國枝利久著「維摩経十喩と和歌——釈教部研究の基礎的作業（六）——」△佛教大学研究紀要・第六十

四号所収▽を参照された。

(16) 大正新脩大藏經No. 262『妙法蓮華經』p. 29 a. 7行目参照。

(17) 大正新脩大藏經No. 262『妙法蓮華經』p. 12 参照。

（せんこ）りえこ

佛教大学非常勤講師
種智院大学非常勤講師

（一九九六年一〇月一六日受理）

